





高橋和巳

憂鬱なる党派

河出・書き下ろし長篇小説叢書 1

書き下ろし長篇小説叢書 1

著者略歴 昭和6年大阪に生れる。旧制松江高校を経て新制京都大学文学部に入学。中国文学、六朝を専攻して29年に卒業。布施市の定時制高校に勤務しながら大学院博士課程を修了。37年、長篇小説『悲の器』が第一回文芸賞長篇部門に当選。著書に『李商隠』『王士禎』（中国詩人選集）、評論集『文学の責任』、長篇小説『捨子物語』『悲の器』がある。現在「朝日ジャーナル」に長篇『邪宗門』を連載中。
現住所・鎌倉市二階堂理智光寺谷七四八

憂鬱なる党派

発行所 東京都千代田区 神田小川町三の六 株式会社 河出書房新社 振替口座（東京）一〇八〇二番	和 巳	昭和四十年十一月三十日 昭和四十年十二月二十日 初版発行 再版発行 著者 高橋和巳 発行所 東京都千代田区神田小川町三の六 河出朋久 印刷者 堀内文治郎 定価五〇〇円
--	--------	---

憂鬱なる党派

書き下ろし長篇小説叢書
1

第一章

1

華麗なショー・ウィンドーや、疲れて粘土色の瞳をした新聞売りらのまえを、動くともみえぬ遅々とした雑沓が彼方へと流れていった。

細かい都会の埃が、銀色に輝く百貨店の無数の窓から、こちらの幅広い石橋の欄杆まで一面にただよい、真夏の太陽がその埃の膜を透してさんさんと輝いていた。雑沓にもまれている人間の一人一人は、みな、死んだように無表情だった。男も女も一樣に唇をうすく開け、眉をしかめ、視線をあらゆる方に力なく注いでいる。黄昏にはまだ間のある烈しい斜陽に、数知れぬ人間の表情が汗ばみ、個性を殺されて皆どこか似通って見える。たしかに、そこにはある共通した翳があった。それは鼻の高低、耳朶の肉付や髪の色合いの相違の上に、貧しい真実となつてあらわれていた。だれでも知っているだろう、巧妙に修正された写真にもなお現われ、あの悲しみでも喜びでもない放心の影にそれは似ていた。

人々の凝固した表情を照らす、その同じ日の光が、人波の頭上を飾る広告や看板、そして店々の巨大なウィンドー・ペインに反射して銀色に輝いていた。ときおり、人波のなかで誰かが叫び声をあげた。だが、人々がその方に振りかえるころには、叫びは群衆のざわめきに融け、首をめぐらしても、もうあと形もなかった。雑沓はずぐ、なにごともしなかつたように流れつづける。横から眺めると、行列はほとんど慎しいものにさえ思われることがあった。そこでは、生活の内面をいるどるかすかな憂愁や、思慮分別、そして、ささやかな喜びなどは見事に無視され、たえず、生活の流れそのもののような鈍い単調な足音だけが悲しげに響いた。無表情に見える人々も、あるいは何かを考えこんでいるのかもしれない。

中年の夫婦が真中に子供をはさみ、たがいに長年の屈辱に耐えるかのように黙々と歩んでゆく。酒気をおびた夫を冷たく眺めながら、それでも夫と肩を並べて歩む人妻。家庭での仏頂面をそのまま持ちこんできている紳士。へし折れそうなハイヒールをはいた娘。白髪を光らせる老婆。彼らは、野の香りや稲穂の波を求めて郊外へ出る労力を惜しみながら、日目の倦怠や憂鬱をひととき忘れようとして、ここにやってきたのだろう。今まで、幾度も期待を裏切られておりながら、まだ紫煙の渦巻く劇場の休憩室や狭い珈琲ルームの一隅に、あるいは見おとしていた安息が宝石のように煌めいていないとはかぎらない、と思ひながら。

本屋の店頭に立ち、小首をかしげて群衆の流れを眺めていた西村恆一は、その時、久しくおさえにおさえていたへ後

悔の念が、せきを切ったように流れだすのを覚えた。

「どうしたんだろう……」

後悔のおとずれはなにも今が初めてではなかった。たとえば人影の途絶えたプラットホームや並木道の散歩、あるいは深夜ねむりをまつ床の中でも、不意に湧きおこることがあった。

咎の汝に属さざるとも……

教えよや、十字架もなく墓もなく

空しく果つるべき身なりや否やを

単調な音楽のように、あるいは海の波音のように、後悔の念は彼の胸をうつ。

西村は書店の敷居のところで、柱に背をもたせ、小刻みに足踏みした。その間にも、その不思議な感情は、彼みずからのものではない一個の生物のように膨脹しつづけていた。

償いがたき悔恨、

われらの記念碑……

それにしても一体、わたしはなにをこんなに後悔することがあるのだろうか？ 彼は、その理由を検討してみようとする。しかし、一向に掘みどころはなく、手がかりは皆無だった。むりもない。彼の後悔の念は、すでに前提となる悪しき行為すら要求しなかったから。ただ、それは雑沓の波動に乗って

流れていき、そして一周りすると、また彼の腺病質な肉体に帰ってきた。

空はやけに晴れわたっている。快晴の多い夏季にしても、こうした天気は珍しい。ところどころ、白く高層にたなびく真綿雲が地上の群衆の動きよりもしずかに流れている。瞳は眩しく、蒼穹に染めおとされた白い雲の断片を追い、脚はなお無意識のうちに群衆に歩調を合わせていた。その空の蒼さに視線をさせているうちに、ふと一瞬、彼は隊伍を組んだ天使たちと草笛の音を思いうかべ、つぎの瞬間、身を虚空にするして雑沓に向かつて自己の「悪」をあばきたく思った。

「当分、雨の降る心配もない」彼は目をふせて呟く。

「それにしても、この後悔の念は、いつ頃から彼の胸を虫ばみはじめたのだったろう？ たしか、毎日毎日がお祭り騒ぎのようだった少年期にも、微笑と鬨争、羞恥と屈辱に満ちていた学生時代にも、そういう奇妙な経験はなかった。それは、ただ単に感ずるための能力に欠けていたにすぎぬにしろ、まだ彼には無縁な感情だった。日頃から過去を恋人のように大切にしてきた彼が、自己の昨日に関して誤りを犯すはずはない。不思議にわからない。」もともと、はっきりとは思いだしたくない秘められた意志が、彼の中で悪性遺伝子のように幅をきかせているからかもしれぬ。

中学生のころ敗戦にあつてから、彼は自分の感覚を越えた理論体系や膨大な仮説を、そして権威ありげなもの的一切を信じなくなっていた。敗戦と、それがどのように関係するか、よく解らない。しかし、錯綜し複雑に入りまじっている

ものを、目の前でたちまちに整理してみせる精神の魔術は、彼には常に許しがたい不誠実のように感じられた。それは才能に恵まれなかったからではなく、記憶以上のものとして今も彼を支配している或る経験のせいだった。あまりにも急激な価値変動を何度も経験しすぎたのだ。それは、おそらく彼だけの経験ではなかった。そして、あの閃光も彼の頭上にだけ咲き散ったのではなかった。人々は同様に教育され、感激し、疑惑し、そして不意に崩れ去ったのだから。

彼の背後の硝子戸には、ひしめき合い、摩擦し合いながら流れる雑沓の影が映っていた。人はみな、わずかのあいだ、その硝子の面におのれの影を投げ、そして通り過ぎてゆく。群衆のなかには、骨格の逞しい駐留軍兵士の姿も混っていた。異国の浪費家のそばには、きまって、原色のワンピース、土気色の肌をした娘がつき添っている。豪華なハンドバッグをさげ、口の中になにか含んで高声に話しかけ、笑いあって通りすぎる。ときには、ただ一人の駐留軍兵士に数人の娼婦が一団になって付きしたがっていることもある。女たちは白痴のように笑い、女王のように闊歩する。しかし、その憐れな姿もすぐ消え、つきには、月給取り、警官、学生、女給などさまざま人間が現われる。それにしても、その硝子の面に幻燈される人波の、なんと悲しげであることか。

〈後悔〉の念は、処理のすべも分らぬまま、徐々に、そして確実に肥大していった。彼はただ、自分の体臭にまもられ、わずかに動物的に抵抗するだけであった。最後に、もしこの現代ではなく別な時代、別な風土、別な社会に生を享けた

のであったなら、もし仮りにあの悲しみの都市に住んでいたのではなかったらと、あり得ない仮説に救いをもとめようとするとき、後悔の念はその極限に達し、そして、おもむろに退潮しはじめるのであった。そして、その退潮の感覚は、少年期——すべてが萌芽の状態にある貴重な時期との無惨な訣別のそれに似ていた。もたらされる悲哀もまた、ほとんど似ていた。

「暑いですわねえ。これじゃ馬だつて卒倒しちゃう」立て掛けられたよしずの影にいた水屋の店主が言った。「いくら鞭で尻を引っぱらいたって、口から泡をふいて動きません。馬だつて癩癩を起しちゃう」

日光をさえぎるよしずが同時に風をさまたげていた。暑さはむしろ戸外よりひどい。店主は脂肪質の体軀を、倦怠と戯れるように小刻みに揺すっていた。坐っている彼の膝の上には、真黒に日焼けした縮れ毛の女の児が睡っている。

「馬は、こんな日によく日射病にやられるんですよ。とくに支那のような大陸の埃っぽい道路だと、ちょっと荷車を曳かすと、きつと音をあげてしまう。黄土が妙に足に粘りついてきましたね。おんなじ場所を四五へん、足踏みして首を横に振りましてね。口から牛のように涎をたらして横倒しになるんです」

「みぞれを下さい」

西村は扇風機が唸っている奥まったデスクに位置すると、重い黒カバンをテーブルの上において言った。扇風機の風は

油臭く、そのうえエナメル臭いがした。飾り気のない板壁には、値段表と、C級の飲食店許可証、映画俳優のプロマイドが斜めに傾けて貼られてあった。その部屋の気配は、来る日も来る日もアパートの一室で机にむかっていた頃の西村の憂鬱、紫色に腫れあがった精神の沈滞と似ていた。薬指の胼胝の上にインクのしみをつけ、無為に煙草を吸い、その紫煙を茫然と目で追っているとき、不意に体がぐいぐいと沈みだす。すべての行為の無意味さを予告するように、あるいはまた、どんな人生の果てにもただ一つの結果しかないことを啓示するように、意識が暗い奈落へと墜落してゆく。なぜなのか、それも彼には解らない。

西村がその大衆喫茶店に入ったのは、ただ渴を癒やすためだけではない。駅についた直後、電話で連絡をとった旧友の古在秀光が、西村の用件をも考慮して待ち合わせの場所として指定したのだ。古在とは旧制中学の時代から、とりわけ、聞け轟きを、怒涛の賦を、と、その寮歌にも歌われるように歴史もまだ新しかった広島高等学校の文科甲類に籍を置いたころからの知己であった。もう十二年、ひと昔も前に、紡績工場経営者の次男であった古在と、女学校校長の長男であった西村とは、ともに連合国の慈悲によって戦災をまぬがれた古都の官立大学に入学した。一人は、自由に自己の嗜好に従って十九世紀のヨーロッパ精神史を専攻し、西村の方は、卒業後の就職にたいする父の配慮に盲従して文学部で英文学を学んだ。七年前、彼は卒業して、学制改革後も共学にならなかった宗教財団経営の女学校の教員になり、その友人は、お

のれ一人の才智で新興の業界新聞社に入社した。資本も経営も安定しない小新聞社を古在は故意に選んだのであることを、西村はその頃から、自分にはない覇気への羨望まじりに推察できていた。おそらく、午後よりも鶏頭という彼の計算は実を結んでいるだろう。彼の存在は、きつと、その企業の中で不可欠のものとなっているにちがいない。——それにくらべて自分は……

久しぶりの西村の訪問を、古在はどのように受けとめるだろうか。知己、知己と繰り返してはならない。彼の中では、それは楽しい予想にはならなかった。彼には、かつて共に生活し同じ学園に学んだ旧友と対等に語りうる地位も地盤もなく、旧友との邂逅に胸をふくらませる稚気も消えていた。往年の夢想癖は、無気力な田舎落ちや、大学院への復帰や、学問的能力への懷疑から恥をしのんでした再勤務や、そして突然の、いまだに根柢のはかり知れぬ、あの「一切の断念」と、それにつづく狂気の時間のあいだに憂鬱な変貌を強いられてしまっていた。はじめ、彼は戦後の荒廃と頽廃からもわかかりよく脱皮し、まともなゼントルマンたるために、少年期の飢餓や憤怒、そして一瞬の閃光とともに都市全体が廢墟と化した死の記憶を消し去ろうとつとめたものだった。日常性の論理、つまりは今日一日の小さな喜びと悲しみへのみかかわっていたかった。いっしか内化された廢墟と死のイメージから逃れるためには、エリートの大理想よりも、平凡な日常生活とその規律の方がより有効だと思われたからだった。夢想の国がそれで一つの遺跡と化しても、平和な日常と安定し

大村は彼のものと成らう。そのスノビズムが一応の成功を見、西村は平凡な学校教員となり、旧家の娘をめぐり、子供を一人生んだ。ただあとは、自己の周辺に固い磐を築くことだけだった。だが、彼は不意に褐色の、煮えたぎるような激怒を覚えて道をふみはずした。不意に、俗物の価値である日常は無に帰し、遠い悲惨な、ぬらぬらと皮膚のずるけてゆくような過去の感覚に彼は捉えられた。そして彼はたちまちにこの時代に対する順応能力を失ってしまったのだ。高等学校から大学、そして教員生活をも含む十余年もの年月の間、懸命に過去を忘れようとし、自分の感情を糊塗したあげく、彼は不意に激怒にかられて、時代から脱落し、日常の規律からもはみ出してしまったのだ。毎朝一定の時刻に果営のアパートを出、近隣の人々とあえば上品に会釈をかわしたその微笑も消え、彼はほとんど誰とも口をきかなくなった。日曜日ごとに妻や子をつれて遊園地にゆき、優しい音楽の流れる食堂で食事をする習慣もなくなった。いや、その習慣を維持しようにも、彼には経済的な支えがなくなった。勤めをやめてしまったからだ。

退職してから、しばらく彼は従来の出無精とは打ってかわって奇妙な漂泊の思いにかられて日々を過ごしたものだ。不意に人間が各自定まった住居を持ち、持たないものも裸の宿借りるように必死に自分の貝殻を求めぬる気持が馬鹿げたものに見えた。勤務先が一定して不変であること、帰宅すべき降車場が、いつも小さな花壇と薄汚れたペンキ文字のある同じ郊外の小駅であるとは、なんと不思議なことだろう。今日は

天蓋の葡萄色に黴んだ、いつも地響きを立てている配電所うらの見慣れた小駅、明日は、海浜の藻の匂いが、鼻を、顔を、想念を、一度にはっと覆う寒村の駅であっては何故いけないのか。月給日には、二合も飲めば真赤になる酒を、飲むべきかどうかと思ひ惑い、その金を妻の好む田舎饅頭に費すことを善だと思っていたのは一体なぜか。あり金のすべてをポケットにねじこみ、夜汽車に乗って、なめらかな山肌が蜿蜒とつづく溪谷を見ていってなせいけないのか。彼はその頃、自分の子供よりも植物採集に興味を覚え、目的もなく、あちらの山、こちらの湖へと旅行し、退職金や失業保険の大半をそれに費した。何かが確かに交りはじめていた。いや、あの時、真面目な青年と言われ、実は是もなく非もなかった一人の人物が誰にも知られず死んでいったのだ。あたかも、自分の立っていたアスファルトの道路に、影絵だけを残して死んだ男のように、一人の人物が後悔を残して死んでいったのだ。じりじりと精神の白血球をなくし、目に見えぬ嘔吐をしつづけ、十数年間も執拗に何事もなかったかのように振舞おうとしたあげくに――

「二十円のにしますか、それとも三十円？ 蜜をね、蜜をはりこんどきますよ」

店主は坐ったまま手廻しの機械を動かして氷を掻いた。

「こういう商売をしてるとね、人間が腐ってしまう。朝一日のうどんを買いこみ、昼間氷を売って、夜は酒。毎日おなじことだ」

自嘲しながら、彼は棕櫚のように大きな掌で皿の上にもつ

た水をおさえて形を整えた。そう言えば、たしかに彼の眼は、なにか難解な腐敗の兆候をしめしていた。目が死ぬのが先か、肉体が減びるのが先か。戸口に垂らされた風鈴が彼の頭の上で、申しわけのように鳴っている。

「なんのこった、それは」机にうつぶせていた酔漢が部屋隅の暗がりから声をかけた。

「静かに寝とれ」と店主は言った。

学生やB.G.もその貧相さに敬遠して暇な店にも、常連がいとみえる。氷水瓜、氷金時、宇治茶氷などの品目に列んで、焼酎四十五円、合成酒五十円と貼札がある。腕の中に顔を埋めた男の頭の前にはコップが濡れて光っていた。

「人間が腐るちゅうのは、なんのこった、よう。おれのことをぬかしとったんだろ。眠ってるふりはしとつても根性まで眠っとるわけじゃないぜ。はつきりと言え、はつきりと。誰が腐るんじやい」

男はふらふらと立ちあがり、西村の坐っているテーブルにやってきた。

「お前の脳味噌が腐りかけとるじやよ」店主は男の頭を指さして言った。

「なにい」男は充血した目をまたたいだ。肥満した店主にくらべて体軀は、あたかも酔漢の経験の貧しさを象徴するように対照的に痩せている。

「ああ、そうか」鼻で笑いながら、その男は毒づいた。「親父の頭が腐るんか。そんなことはわざわざ言わんとていい。あたりまえのこった。しかし何で腐るんだよ。そうだ。やは

り、おれのことを言っとんだろ。そうでっしゃろ」

男は西村を覗きこんで言った。その時、店主に抱かれていた縮れ毛の子供が目さまして泣きだした。店主の鈍重な表情に悲哀の翳がかすめ、店主は自分の水を少女に持たせて機嫌をとった。少女の体は日焼けして黒いものではなかった。額の狭い小さな顔に似ず、いかめしく横にはった鼻は、あきらかに混血児のものであった。

「うるさいなあ」と酔っぱらいは言った。「昼寝から醒めるたんびにわあわあ泣いとると、また街路へ放りだすぞ」

「お前の知ったことじゃない」

「しかしやな。こいつの泣き声は、なんか陰にこもつとる。一体それが日本語の泣き声かよ」

少女は不意に泣きやむと、部厚い唇をまるめて、酔漢の方へべつと唾を吐いた。

「暑いなあ」店主が言った。「天井からじりじり熱気が降ってくる。馬でもこんな洞窟には耐えられん」

その暑さにあおられて、混血児とも酔漢とも関係なく、西村はしきりに「絳雲」という言葉を想い出していた。ローズ・イ・クラウド、薔薇いろの雲、あるいはたんに炎天というのだろうか。いい言葉だ。一昔前の冷却説よりも、やがて宇宙全体が、膨脹し灼熱の炉となって爆発するというのは何と魅力ある未来図であることが。

軒先の硝子細工の簾が、知恵のない女の首飾りのように揺れる。表通りの雑沓の足音が、その簾の鳴る音と入りまじって遠くからきこえる蛮族の輪舞のように響く。喫茶店の安っぽい造花の花が、幾度かその硝子の簾に触れた。その造花の枝を左手で避けながら、西村の最後の夢の託された旧友が入ってきた。それは顔を肝臓病者のように腫らした男だった。古在は西村の方をしばらく凝視して、開襟シャツのボタンをゆっくりはずしてから、

「驚いたか」と言った。
西村は理由もなく、一瞬、むかし妻の孕んだ子の墮胎をひそかに考えながら、新聞から鏡台に視線を移したときの自分の顔を思い出した。

「古在か」西村は呟き、古在の顔ではなく、埃をかぶった古い靴と、ほとんど灰色になった麻の白ズボンを見た。

「何を考えていた？」相手は重苦しい声で言った。
「何にいたしまひよ」店主が言った。

古在は、しばらく枯木のように沈黙のまま上体を揺すり、無意味に今はいつてきた戸口を振りかえった。無造作に刈り込まれた髪の毛が白い開襟シャツの襟と対照して黒く光っていた。第三者の目にはおそろく、正体の知れぬ社会の正義におびえる犯罪者のようにみえるだろう。それは西村の予想した、社会人として成熟した旧友の姿ではなかった。何があったのだらう？ 西村は握手のために差しだそうとした手をひっこめ、汗に濡れた掌を揉みあわせた。かつて詰襟服の肩を怒らせ、十九世紀精神の諸問題を、たとえばワインマールの

教養主義にもかかわらず、ますます分裂してゆく精神と労働の分業矛盾をみずからの矛盾として担っていると誇っていた彼岸は、今も極端にそびやかしている肩にはなかった。ルソーやイエリネックの万人平等説も、やはり手のとどかぬ白色の国の理念にすぎなかったのかもしれない。

久方振りの邂逅というものが、人を空想させる華々しさも抒情も、何もなかった。映画やテレビならば、たった二人の邂逅や別離にも、その前には物悲しげな音楽が奏でられ、灰色の海や人気のない公孫樹の並木が背景となって、音楽は、呟きからやがて高潮に達する。しかし古在との再会には、彼独特の地面を高く蹴たてる靴音すらなかった。逆光のためか瞳のうるむはずもない西村の目に、相手の表情も朦朧として映る。

いや、正確に言えば、よく見えなかったのではなく、眼前の旧友の像を、西村は信じたくなかったにすぎない。中世の幻想、アルキポンドイの「秋の顔」のように、相手の頬の筋肉は秋風に葉をもぎとられた梧桐の梢のようだった。目は毛虫の幼虫を宿して腐った果実のように見える。信じたくないな、と西村は漠然と思った。

「東京の方はどうだった？」古在は簡単に言った。

「手紙に書いた通りの有様だ。少しは世間のことも知っているつもりだったが、気がついてみると、僕はおそろしくのろまな、時代錯誤的な人間だったようだ。郷里を出てから、もう二カ月になるんだけどね。効果的な手一つ打てぬままに、見知らぬ街をただうろろと歩きまわっていただけだった。

何の成果もなかった。そして今も何の見通しもない」

「昔の教授が誰かの紹介状は持っていたんだらう」

「最初は、郷里の平和擁護委員会の会長の推薦状をつけてね、その友人が出版部の次長をしている××社に郵送してあった。一度あつて、相談したいと呼び出しがあつた。そして、全面的に訂正しなければという、つまりは慫慂にことわられてから、田舎の次男坊か三男坊が就職口を探すように、このカバンをかかえて……」

西村が携えている古い黒カバンの中には、彼が突如、褐色の憤怒にかられて職を退き、日常的な平静さや幸福の一切を犠牲にして仕上げた、その後の五年間の努力の結晶がつまっていた。それは学問的な研究でも彼の思想の開陳でもなく、ただ、ある一時期の過去を彼と共にし、そして同一時刻に惨死した三十数人の平凡な庶民の伝記にすぎなかつた。しかし物言わずして死んだ三十六人の近隣の人々の死は、いかなるセオリーよりも彼自身には重い意味をもつものと思われた。

平凡になりたがり、平静に日々を過したがっていた自己自身への激怒にかられ、そして、その怒りの淵をじっと覗き込んでみて、彼はそのもの言わぬ死の事実に行きあたつたのだ。

いや、今はその三十六人の死のもつ象徴の意味の解説や彼の行為に冠しうる大義名分は、むしろ第一義的ではなくなつた。彼の選んだ行為が何であれ、じりじりと精神の白血球をなくし、目に見えぬ嘔吐をしつつけてのち、はじめてみずから選んだ行為であるゆえに、彼自身にとって、それは無意味なものではありえなかつた。初めて、みずからによって、他の何

者にも強制されずに始めたこの仕事が、無意味であつたなどとはどうして考えられようか。もし、これが全くの徒勞であるならば……

「今はゆっくり話をしてる暇はないんだが」古在が言つた。「君の用件は手紙でほぼ想像できている。昔のように安請合はできないが、おれにできる範囲内では努力してみようと思つている。詳しい話は、今夜、今夜は宿直だけれども、社前の飲屋でも聴こう。もし交替してくれるやつがあれば、おれのアパートへ来てもらつてもいい」

「ありがとう」西村は呟いた。触れたくない失望感が娼婦のように彼にまつわりついてきた。あちらで駄目であつたものが、こちらで成功するという甘い夢想は、ほんらい落伍者の足掻きにすぎない。やはり、やはり、ここでも万事うまく行かないだらう。

「今度の君の仕事にも勿論興味はあるが、君が手紙の中でつかつていた突然の断念ということの内容もきいてみたい。決断じゃなくて、断念であることが、君らしいことだしね」

「いや、二カ月間、無駄に歩きまわっているうちに」西村は目を伏せた。「またしても僕は思い誤つたのかもしれないという絶望感に幾度かおそれられた。なぜと言つて、僕のこだわつた事は、もう人々にはどうでもいい事なんだから。いや、僕自身も五年前まではそう思い込もうとしていた。人が生きてゆくためにはなんと言つても要領というものがいる。その要領とは、多分あまりに直接的な、閉ざされた経験は、あつさり抹殺するか忘れ去ることによって成り立つんだから。事

務的に有能な教員であるためにも、過去の典籍の平静な探究者になるためにも、そして、あわよくば名譽を獲得するためにも、原爆被災のことなどは、できるだけ早く忘れ去るべきだった」

「ちょっと待てよ。おれは錯覚をしていたらしい。君の今度の仕事というのは、君の専門の方の、何だっけ？ そうイギリスの世紀末文学についての研究論文ではなかったのか」

「もしそうなら、こうして君の助力を求めてやってくることもなかっただろう。学問的な研究には華々しさはないけれども、その代り世相の移りかわりには超然としていることができる。だが、……」

煙草が吸いたいと、不意に西村は思った。あわてて彼は自分のポケットをさぐってみた。煙草は空箱だけが残っていて、胸のポケットには吸殻もなかった。

あたかも繁華街の群衆の流れがそうであるように、物憂い物音とともにすべてのことは過ぎ去ってゆく。ある種の歌曲が流行し、そしてすたれ、女性のスカートが長くなり、また短かく変るように、かつての戦争の悲惨も時がたてば観光資源となり、ケロイドも整形手術されて一般的な事故による傷と同一化されてゆく。

「君は泊るところはあるのか」古在は話題をかえた。

「女房の親戚が二三軒あるときいている。しかし、そういう所のやっかいにはなりたくない」

二人は初めて曖昧な微笑を交した。

「今度の仕事は研究論文じゃないにしても、君のことだから、

そっちの方も放りだすようなことはしてないんだろ」古在が言った。「虚構の研究……イギリス文学のことはよくは知らんが、誰かが本気になって究めねばならんことだろうからね、なせ、フィクションという奴が、この近代から現代にかけて、人間の事実（彼は昔から真実という言葉が嫌いだった）の表現形式として圧倒的な位置を占めたのか、何科の専攻であれ、誰かが本気になって考えてみる必要のあることだった」

「いや、それはやってないんだ、何も」

「そうか、まあ、ええさ」

古在は何事もなかったように、次に自分の仕事のことを語った。業界新聞があらたに経済雑誌をも兼ねる事業拡大を計り、印刷して形をととのえては数週間で崩れる永遠の贗気楼の物語である。彼はすでに編集主任の位置についていたが、話はほとんど無感動な独白に似ていた。あらゆる株式会社組織にあるカリスマ支配の残滓。下部厳密、上部緩慢とでもいふべき奇妙な合理主義。個人的復讐意識と市場競争のからみあい。そして、祇園の舞子が胸に抱いて撫でてやらねば癒えぬ社長族の秘められた劣等感など――

西村は古在の語調のなかに、この島国ではじめて地平線を望んだときの、焼けただれた廃墟の臭いを、いや、風景ばかりではなく自分の六腑も爛れてゆくような臭いを嗅いだ。想像の膜の上に、何の脈絡もなく、廃墟の中の、工場の鉄梁と鉄棟が朝霧におおわれて浮かぶ。古在は煙草をとりだして、西村にすすめた。気まずい沈黙の時間がやってきた。苛々しながらマッチを擦り、古在は震える手でその火を西村の前に

つきだした。西村は何年振りかの旧友の贈物を、目をつむって味わう。沈黙は、やがて夏の日の午後にはふさわしくない一種寒々とした、そして、それ以外に十分な合意のような孤獨な人間同士の空間に変わってゆくかのようだった。

「実は君の手紙をもらってから、すぐまた、もう一つの手紙をもらった。親しい友人とはいえ、個人生活の問題にはかわりたくはないが、少し気にかかることが書いてあった」

「何のことだ、それは？」西村には解らなかつた。

「想像できるだろう。ここでは言えない。ただ、われわれはギリシャの貴族ではないんだから、自分が一つの想念にとじこもる際にも、家族の者への経済的な配慮を怠っちゃいかんと思うね。ともかく、五時過ぎにもう一度会社の方へ電話してほしい。そのとき、電話口におれはいなくとも、どこで会えるかは、受付に伝えておく」

「わかつた」

「昔の連中には連絡してみたか」古在はポケットから名刺入れをぬきだしながら言った。「ほんの数人になってしまったけれどね。能なしか、ほかに帰ってゆくところもないからか、この町に働いてくぼっている奴がいる。蒔田は放送局、村瀬は関西電力の本社、青戸は大学の研究室、岡屋敷は労働会館の資料部にいる。それから藤堂は……彼は君の方がよく知ってるだろう。おれは知らない」

それぞれ名前よりも肩書きの方が目立つ名刺を四枚テーブルに置き、古在自身のものを最後につけ加えた。

私には名刺もない、と西村は思った。不良少年の仲間では、

自分の情人を持たないことは、その男の劣性を意味する。成年に達して名刺も持たない迂濶さは、おそらく、その人間の決定的な貧困を意味するだろう。

「他の連中にも時間はないだろうが、しばらく映画でもみたりや、いいだろう」

西村は、故意か偶然か古在の言いおとしたもう一人の人物の近況を知りたかつたのだが、それは言い出さなかつた。

「映画にも興味はなくなつてしまった」西村は煙草をもみ消し、安定のないテーブルの上の黒カバンを引きよせて言った。「それより立河という出版社へ先によつておこうと思う。所番地はこの近所のはずなんだが、知らないか」

「ああ、そうだったな」

そうあわてても仕方がないだろう、という風に古在が僅かに残っていた友情に目を細めて憐れむように西村を見、西村の方は恥じねばならぬ用件ではないと思いつつ、なぜか羞恥におそわれて目を伏せた。

進歩的な改革や正義——そうした人を和ませ勇気づける観念群から、あまりに遠くへだたつて生きてきたためだろうか。自分の方から何か用件を持ち出そうとするとき、西村は必ず羞恥におそわれる。彼にとつて進歩とは、父が晩年に到達した社会的地位を、より若い年齢で獲得すること、あるいは英語で発言した作家や詩人の伝記や思想を研究し考証することを意味し、改革が、彼の勤務した女学校のカリキュラム編成の改善、あるいは職員幹部と教材業者の不明瞭な関係を暴露することであつたとすれば、彼は進歩も改革も何もしなかつた。

た。知識は、知っている対象、たとえばパイロンやワイルドに對して、研究者である彼は、原理的にその者に及ばないと思ひこませるのに役立ただけだった。理解するという尊重さるべき操作そのものの中に、それが予想するのとは全く別の破壊力がひそめられていて、彼はそれにもみくちやにされた。彼が研究対象を尊敬しながら、それと對等たるためには、ただ、全体的な知識、その一人の人間を規定した諸条件を、歴史を、習慣を、生産關係を、全能者のごとく鳥瞰することだけだった。そして彼は、もちろん神ではなく、神のように天上の高みから人事を見下ろし、その心理の變にわけ入ることとはできなかった。しかし、それは出来そうな錯覚だけで充分であり、過去の作品を素材にして、今までになされた発表よりも、より巧妙的確に、一人の思想家の解説をものにすることは事実上不可能ではなかった。少くとも、そう思われた時期もあったのだ。にもかかわらず、なぜ自分を無理強いにしても、そう仕向けなかったのか。なぜ、みずからの過去、いや、その過去の一瞬に触れたにすぎぬ亡者のことにのみこだわらねばならなかったのか。円山応挙の亡霊の絵のように、それらの人々の姿がいかに悲しく、またおそろしかろうと、もうそれは過ぎ去ったはずのことだった。またたとえ、アリゾナの砂漠で、シベリアの奥地で、あるいはピキニの珊瑚礁で今も同じ閃光が光りつづけているとはいへ、少くともあれそのものは消え去った。最初は、たしかに七十年間の不毛と言われた。しかし、それは間違っていた。家は建ち、人は住み、花は咲いた。

毎年夏に、世界的な大会が、故郷の町でその日を記念して催されてはいる。しかし、本当にその被害を受けた人々の大半は、賢明にも、できるだけそれを忘れようとしている。彼も、はじめ人々の態度に賛成だった。にもかかわらず、なぜ……

「あなたはアルバイトの口でも探しているのかね」店主が横あいから言った。

「いや」西村は曖昧に笑った。

「若いね、あなたは」酔漢が横から言った。「おい親父、焼酎を一杯ついでくれ。ちょっと氷のかち破りを入れてな」

「出版社を探してるんです。郷里の知人の紹介で会っておきたい人があるんで。立河出版っていうんです」

西村は懐の財布をさぐり、店を出る準備をした。

「立河出版が求人広告でも出しましたか。大会社も夏枯れであえいどるのに、景気がいいのかな」

「知ってられるんですか、その場所」

「ああ、知ってるよ」

「教えて下さい。やはり今日、一応顔を出しとった方がいい」

「そりゃ教えますがね」店主は一瞬、奇妙なうす笑いをもらした。「一体、何の用があるんだね」

「それと、もう一つ、安い旅館も教えてほしいですがね」西村は教壇口調で言った。

「何の用があるのかね」店主は繰り返した。

「今、何時ですか」西村は言った。

「要領をえんインテリの相手などやめてき、親父、酒をもう一ぱいついであれよ」酔っぱらいが言った。「根津大尉殿、酒木当番は、一ぱい老酒をいただきますのであります。ありますよ」

「時間は三時だがね。あんたは何をしに行くのかね？」店主は風鈴と肩をならべた蠅取紙の蠅をつまみおとしながら言った。西村は目をそむけて黙っていた。

「日浦朝子はどうしているだろうか」しばらくして西村は古在に言った。

「えッ、何か言ったか」古在は廻転する扇風機に汗の流れる顔を向けたまま聞きかえした。

「いや、別に」西村は答えた。

店主は柱から蠅たたきを取り出して自分の体の上にとまった蠅をびしゃりと打ち殺した。

「暑いな」店主は言った。

「酒をもらおうかな、僕も」西村は自嘲的に言った。

「やめておけ、酒は今晚一緒にのもう」古在が言った。

「自虐で言ってるわけじゃないんだ」西村は弁解した。「腹のへった人間が飯をくいたくなるように、酒を飲みたくなることもあるだろう。郷里を出てから、こんな気分になつたことはなかった」

古在は、今まで西村の知らなかつた皮肉な、憐れむような表情をした。

「仕事があるので、それでは、これで失礼する」

古在は、店主に二人分の代金を支払い、煙草を卓子の上に

おくと、炎天下へ出て行つた。学生時代、明日も否応なしに顔を会わずすわすわかの間の別離にも、指をこめかみのあたりでひらひらと振つた善良な性癖は、もう消えてなくなつていた。

3

思いがけない暗いまなざしだつた。えび茶に灰色のまじつた地味なトロピカルの肩を心もちそびやかし、相手は目に焦躁が凝りかたまつてゐるのを自覚して恥じるのか、顔を深くふせたまま出迎えた。しかし、隠そうとする意志が、かえつてその瞳の頹廃を印象づける結果になつた。垂れさがつた髪も、光沢を失つた瞳と、そこに集中する感情の荒廃を覆いつくせていない。あきらかに、それは生活の代償に支払つた率直さや若さ、その代りに加えられた身をさいなむ夢と無益な心労がもたらしたものだ。いや、すこしくめられた肩や、ごく自然に傾くことのできる頸など、人目にはたたぬ品のいい素振りに変化はなかつたから、かつては彼女の魅力の源泉であつた瞳の転落が、ひときわ目立つのかも知れない。むかし、日浦朝子の眼は、つねに内省的にうるおい、西村たちの大学のあつた古都を流れる浅瀬の川の反映のように、青く澄んでゐた。橋梁の支柱やわずかの落差で、川の水は飛沫をあげ、日の光に白くひるがえるように、それは小さな感情の起伏、喜びや悲しみにも、すぐきらきらと反応したものだ。

「随分とお久しぶり、筆無精だもんだから」

撒水の跡が残っている清楚な小学校の玄関口には、某々年